特集―遺跡のなかの民俗学 附 論

山城地域における前方後円墳と地域の暮らし

Keyhole-Shaped Kofun and Local Life in the Yamashiro Region

惠谷 浩子（奈良文化財研究所）
EDANI HIROKO (Nara National Research Institute for Cultural Properties)

前方後円墳 / Keyhole-Shaped Kofun
土地利用 / Land Use　口碑伝承 / Oral Tradition
京都の周縁部 / Periphery of Kyoto
近現代 / The Modern Era

はじめに

遺跡は、顕著な考古学的価値を持った時代にのみ価値が置かれがちである。しかし、その遺跡での営みが行われなくなってからも、遺跡がある土地は、海や川の底に沈まない限り無くなることはない。別の土地利用が行われたり、何らかの場所として記憶が引き継がれたりしながら、地域のなかにずっと存在し続けてきたことを忘れてはならない。

特に古墳は、古墳時代の終焉とともにその価値を少しずつ変化させながら、後世にまで目に見える形で引き継がれてきた分かりやすい例と言える。副葬品が盗掘されたり、墳丘が信仰の対象として利用されたり、石室の部材が転用されたりしながら、一定の役割を歴史的に担ってきた。後世における古墳の再利用について、林正憲は発掘調査の成果をもとに、埋葬施設の再利用と墳丘上の再利用に分けたうえで、墳丘上のものを、墓地、経塚埋葬地、中世城郭、意図が不明なものの４区分で整理している（林 2005）。

そこで本稿では、山城地域にある前方後円墳を対象に、近代から現代にかけての土地利用の変遷や口碑伝承について把握したうえで、地域の暮らしのなかでの役割や意味について検討したい。

１．調査の概要

（1）対象

調査対象は、円墳や方墳なども含めると膨大になるため、本稿では山城地域に所在する前方後円墳69基とした。一覧の作成にあたっては、『前方後円墳集成 関西編』（近藤義郎編 1992）と『前方後円墳集成　補遺編』（近藤義郎編 2000）に記載の66基を基本とした（以下、両文献をあわせて『前方後円墳集成』と略す）。『前方後円墳集成』では前方後方墳や帆立貝形古墳も対象としているため、本稿でもこれらを含めた。また、その後の発掘調査等で前方後円墳と判明した境野１号墳（大山崎町）、天理山３号墳（京田辺市）、吐師七ッ塚５号墳（木津川市）の３基も一覧に加えて、計69基とした。

（2）調査項目

これら69基について、①文化財指定の有無、②墳長（m）、③現状、④墳丘の土地利用、⑤『山州名跡志』での記述、⑥その他の口碑伝承等、について文献調査を主としながら調べた。それを整理したものが本稿末の表１で、その各項目の記載は以下のように行った[1)]。

① 文化財指定：文化庁「国指定文化財等データベース」等を参照し、文化財としての指定の有無を確認した。指定されている場合は、指定の主体（国／京都府／市町村）、文化財の種別、指定年を記載した。

② 墳長（m）：『前方後円墳集成』及び表１の出典欄の文献から記載した。

③ 現状：墳丘が現存しているか消失しているか。現存の場合は「○」、消失の場合は「×」、現存している部分と消失している部分とがある場合は「△」を記入した。なお、消失の場合は、『前方後

円墳集成』及び表１の出典欄に記載の文献、国土地理院「地理院地図」等を参照して消失の年代と理由を整理した。

④　墳丘の土地利用：大正期、考古学的調査研究時、現在、という３段階で確認していった。

「大正期」の土地利用は、陸地測量部２万５千分１地形図（大正11年〈1922〉及び京都市都市計画基本図（縮尺３千分１）（大正11年）を使用した。

「考古学的調査研究時」の土地利用は、近代以降の考古学的アプローチによる調査報告書等から、分布調査や発掘調査時の状況として読み取れるものを記載した。参照した文献は表１の出典欄に記した。

「現在」の状況は、国土地理院「地理院地図」とGoogleマップを参照しつつ、不明なものは現地確認を行った。

⑤　『山州名跡志』の状況・伝承・考証：『新修京都叢書　第18巻　山州名跡志　乾』（新修京都叢書刊行会 1967）及び『新修京都叢書　第19巻　山州名跡志　坤』（新修京都叢書刊行会 1968）を底本に使用した。

⑥　その他の口碑伝承等：各出典欄に記載の文献や現地調査から由来や伝承、俗称等について記載した。

⑦　出典：『前方後円墳集成』以外の参照文献を記載した。

69基の前方後円墳の位置は本稿末に図13として示した。また、大正期の墳丘の土地利用の把握に用いた京都市都市計画基本図（大正11年）のなかで、墳丘の姿が読み取れるものは図14として一括して掲載した。

２．利用や伝承が読み取れる文献や地図

山城地域の前方後円墳が後世の時代にどのように認識され、伝承され、そして、土地利用が行われていたかを知るために、文献史料や発掘調査の報告書、地図類を手がかりとした。その上で表１のように整理したのだが、まずこれら史資料の概要を述べておきたい。

（1）近世までの史料

山城地域の前方後円墳の近世までの姿をある程度まとまって俯瞰することができたのが、白慧（坂内直頼）により正徳元年（1711）に刊行された『山州名跡志』であった。『山州名跡志』は元禄年間に実地踏査が行われ、寺社や名所旧跡の由来や状況を記した山城地域の代表的な地誌である。22巻25冊にもわたって詳しく記されている総合地誌で、前方後円墳69基のうち20基について、直接的ないし間接的に関わりのある記述が見られた。『山州名跡志』は、当時の人々にその存在が認識されていた塚かどうか、つまり、近世の段階で著名な塚であったものを知る手がかりとして有効と考えられる。ただし、塚の使われ方までは記されてはいない。

個別の前方後円墳に関するものもいくつか確認できた。例えば、宇治市の宇治二子塚古墳（No. 34）は、藤原忠實の日記『殿暦』の康和５年（1103）７月24日の条には「二子墓程車軸打〔折〕、其間暫遅々、渡宇治橋間」、藤原頼長の日記『台記』の久安６年（1150）９月26日の条には「比レ至二二子陵邊一天曙」とあり、平安時代から存在が知られていたことがわかる。別業の地であった宇治への経路の近くにあったため、平安貴族の日記にも記されたのである。また、鎌倉初期の荘園絵図「山城地域宇治郡山科地方図」（写）[2] にも小丘の絵とともに「二子塚」という記載がある。

秋里籬島による『都名所図会』（安永９年〈1780〉）では、京都市の天鼓ノ森古墳（No. ８）と天皇の杜古墳（No. 11）が記されていた。天鼓ノ森古墳は「天皷森　下山田のひがしにして小社あり由来未考」、天皇の杜古墳は「文徳天皇陵　下山田の南陵村にあり」とあり、江戸時代後期に名所として紹介された。

江戸幕府によって行われた天皇陵の探索と補修の事業に関わる史料も見られた。まず、森浩一によって昭和47年（1972）に紹介された「下山田村領田地之中二有之分塚」という史料である（図１）。元禄11年（1698）に記されたもので、下山田村（現在の京都市西京区山田のあたり）にある８基の古墳について、墳形平面の略図とともに、大きさや形、土地利用の状況について記録されている[3]。この８基のなかに２基の前方後円墳が含まれていて、そこには以下のように記されている。

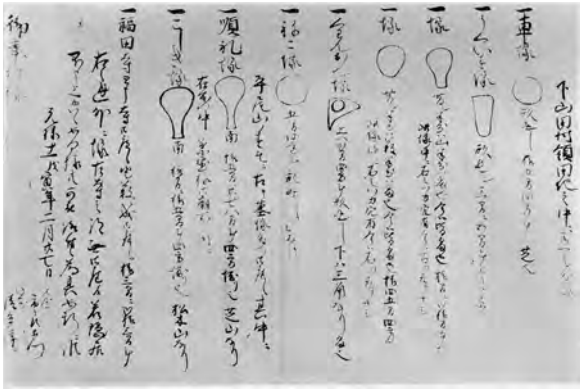

図１　「下山田村領田地之中二有之分塚」[4)]

一　順礼塚　拾五間ニ廿七八間計、四方堀り也、芝山なり
　　所在の中、葉室様御廟所之内ニ
一　こしき塚　拾間ニ拾五間計、四方堀り也、松木山なり

順礼塚は巡礼塚古墳（No. 10）を指していると考えて良いだろう。こしき塚は、森浩一によって穀塚古墳（No. ６）と同定されている（森 1972）。江戸時代の中頃、巡礼塚古墳は草地、穀塚古墳はアカマツ林だったことから、両古墳が燃料や採草を目的とした里山として利用されていたことが分かる。

また、向日市の旧家には物集女車塚古墳（No.13）の陵墓関係の史料が残されていて、玉城玲子による詳細な報告もある（玉城 1988）。

（2）近代以降の考古学的アプローチからの文献

近代以降は考古学の学術的観点から古墳の調査が行われるようになり、前方後円墳に関する調査報告書や論文が豊富になる。特に、大正５年（1916）に日本で初めての考古学講座が創設された京都帝国大学の存在は大きく、その教員らによって京都の周縁地域では20世紀前半から活発に古墳調査が進められた。京都府が大正６年（1917）から実施した京都府下の文化財調査も、同講座の教員であった梅原末治が遺跡を担当している。その調査報告書である『京都府史蹟勝地調査會報告』、『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』、『京都府文化財調査報告』、また梅原による『久津川古墳研究』などの文献から、山城地域の26基の前方後円墳について梅原が調査をして何らかの記述を行っていることを確認した。

梅原による報告のなかで興味深かったのは、それぞれの古墳について、古墳の形状や大きさ、石室の構造遺物の状況とともに、土地利用の状況や破壊の経緯、伝承といった事柄も記していることである。例えば、向日市の元稲荷古墳（No. 18）についての記述を取り上げてみたい（梅原 1920b）。

現今ニテハ其ノ境内地トナリ、處々ニ櫻等ヲ植エテ保存セリ。（中略）後圓部ノ上部ニ稲荷社ヲ祀レルコトアリ。

また、京田辺市の大住車塚古墳（No. 60）の解説は以下のように始まる（梅原 1922c）。

此の北ナル一基ハ俗ニ八王寺ノ車塚又ハ智光寺山ト呼ビ北西ニ面セル前方後円墳ナリ。周邊水田トナリテ爲ニ耕作ニ當リ封土ヲ削レル部分ヲ見ルモ、大體ノ形ヲ存シ墳上松樹繁茂シテ其ノ所在ヲ明示セリ。

さらに、八幡市の八幡西車塚古墳（No. 58）では地域住民に聞き取りを行ったことが分かる（梅原 1919）。

發掘當時之ヲ實見セリト云フ河井うの女ノ談ニ依ルニ、室ノ大サハ竪九尺、横二尺、高サ三尺内外ニシテ、壁ハ積ムニ扁平ナル水成岩ヲ以テセリ。今街道ヨリ八角堂ニ登ル石階ニ使用スル石材是レナリト云フ。

発掘を伴わない踏査が中心だったからということもあるだろうが、梅原は地域に残る口碑伝承や土地利用の状況にもある程度注目していたことがわかる。また、大正６年からの京都府下の文化財調査において梅原とともに実質的な調査委員を務めた西田直二郎の存在も影響していると考えられる。西田は後に京都帝国大学に民俗学を呼び込んだ人物である（菊地 2008）。

第二次世界大戦後になると、高度経済成長に伴う発掘調査が増加して、詳細な古墳の報告書が多く刊行されるようになる。一方で、そうした発掘調査報告書には土地利用や伝承といった内容は書かれなくなる傾向がみられた。その要因として、調査の目的が遺跡の発掘に特化していったことや、報告書への記載内容が遺構・遺物に収斂されていったこと、地域において口碑伝承の記憶が薄れていったこと、考古学が学術的に確立されていくなかで歴史学や民俗学との遊離が進んだ

こと、などが挙げられるだろう。

そのなかでも特に、昭和41年（1966）に文化財保護委員会から出された『埋蔵文化財発掘調査の手びき』は、調査や報告書の内容に大きな影響を及ぼしたと考えられる[5)]。その序において、当時の記念物課長であった柳川覚治は、「緊急発掘調査の実をあげるためには、専門的な知識と技術を身につけた調査員の養成確保と資質の向上が強く要望される」ため、専門的な知識と技術の普及を目指して手引きを作成したとする。

この手引きでは、第２章の分布調査の項目に、地域での聞き取りについて以下のように記されている。

> 分布調査に当たって、最終的に頼れるのは調査者自身の観察力だけであるが、土地の人々に遺跡についての情報を聞くことも補助手段として有効である。すでに消滅した遺跡については、破壊状況を目撃した人の話を聞くより仕方ないが、その場合、誘導尋問にならないよう注意する。地元の人は特に関心を持っている人でないかぎり、ふだん遺跡に注意を払っているわけではないから、その発言を過信してはいけない。「どこそこに遺跡がある」という肯定的な発言はおおむね信頼できるが、「このあたりに遺跡はない」といった否定的な発言は、そのまま受け取ってはいけない。なかには自分の所有地や耕作地を荒らされることをおそれて、遺跡の所在を教えてくれない人もあるから注意を要する。この点については調査者自身も十分に自戒して、踏査中に作物を傷つけたりしないように留意し地元の人々の信頼を得るよう心がけねばならない。

いま読むとなかなか刺激的な内容であるが、当時の遺跡を取り巻く状況の一端を知ることができる。そして、聞き取りは遺跡の所在を知るための手段として位置づけられていたことも分かる。

さらに、同書第３章には遺跡の発掘調査の具体的な内容が記されていて、その古墳の項目には、「古墳は埋葬とそれにともなう儀礼のうえに現わされた巨大な記念物である。したがってこの儀礼の過程を一歩ずつときほぐすことを目標として調査に対処すべきであろう」とある。調査を通じて築造時の姿や意味を明らかにすることが目指された。

こうした調査のまとめとして、同書第５章に「報告書記載の要件」が記される。そこで挙げられたのは、①遺跡の名称と所在地、②遺跡を調査するにいたるまでの経過、③調査の経過、④遺跡、遺物の記述、⑤遺構・遺物の考察、の５項目である。

平成22年（2010）３月に文化庁記念物課から新たな手引書『発掘調査のてびき』が刊行されるまで、『埋蔵文化財発掘調査の手びき』は、「40年の長きにわたり、発掘調査における指針としての意義を保ちつづけ」（文化庁文化財部記念物課編 2010）、その間、発掘調査報告書の内容は上記５項目に収斂されていったと考えて良いだろう。もちろん、発掘調査の精度を上げるという意味で、この手引きの刊行に大きな意義があったことは論を俟たない。また、発掘調査の多くは事業者等の経費負担か公費により実施される以上、費用対効果に配慮しながら進めなければならないため、口碑伝承や土地利用といった内容まで把握できないという実情もある。

それでも、『井ノ内稲荷塚古墳の研究』（大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団 2005）や『五ケ庄二子塚古墳発掘調査報告』（宇治市教育委員会 1992）には、古代以降の古墳の認識や利用についての調査内容や考察があることも指摘しておきたい。

（3）近代以降の地図類

近代以降の古墳所在地の土地利用は、地形図からおおむね知ることができる。特に山城地域のエリアでは早くから陸地測量部等による測量が行われてきたので、明治期以降の中縮尺の地形図から変遷を追うことができる。

例えば、明治期のものでは、参謀本部の計画により明治期に作成した「仮製地形図」（縮尺２万分１）と「正式地形図」（縮尺２万分１）がある。大正期に入ると「２万５千分１地形図」の作成が開始され、山城地域のエリアでは大正11年という非常に早い段階で測図が行われた。これらのうち、正式地形図と２万５千分１地形図は時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」で閲覧が可能となっている。

一方、京都市でも大正11年に最初の都市計画基本図

が作成されている。市域の拡大も想定していたのか、当時の市域を超えて南は宇治川まで、京都盆地の大半を含んだ広い範囲で地図が作成された。これにより３千分１という詳細なスケールで山城地域の約100年前の古墳の状況を地図上で知ることができる。なお、京都市都市計画基本図は、大正11年から昭和28年(1953)までものは立命館大学アート・リサーチセンター「近代京都オーバーレイマップ」から閲覧でき、京都の近代以降の変容を容易に知ることができる。

２．近代以降のさまざまな利用

次に、69基の墳丘の土地利用の変遷から見えてきた近代以降の特徴について述べることとする。

(1) 生産の場としての利用

山城の前方後円墳のその後の利用で最も多かったのが、墳丘を竹林や農地など生産の場とする事例であった。地図や文献から大正期の土地利用を読み取ると、山林としての利用は、竹林：21基、針葉樹林：21基、広葉樹林：７基、農地としての利用は、果樹園：19基、茶畑：５基であった（土地利用の重複あり）。当時の植生や山林の利用のあり方を考えると、針葉樹林はアカマツ林、広葉樹林は薪炭林が多くを占めていたことが想像できる。

竹林として利用される前方後円墳は乙訓古墳群に多くあった。今回対象とした乙訓古墳群の前方後円墳25基のうち、半分ほどに当たる12基が大正期に竹林であった。乙訓古墳群は京都盆地の西端の「西丘」と呼ばれる丘陵部に位置する。西丘、つまり、樫原から向日市にかけての向日丘陵や、大原野から長岡京市にかけての西山丘陵は、主として更新統の砂礫や粘土の互層で、用材を生産する林業地としては不向きの土地である。こうした条件を活かして天保年間（1830～43）にモウソウチクのタケノコ栽培が普及し、その後、栽培面積を増やしていった（長岡京市教育委員会編 2000）。西丘では現在も高品質のタケノコ生産を目的とした竹林施業が行なわれ、トップシーズンには１本数千円で取引されるものもある。

また、古墳の調査報告書の記述のなかで、アカマツ林や草地といった里山的な利用から、タケノコ栽培用の竹林へ変化した例が散見された。向日市の妙見山古墳(No. 15)や長岡京市の長法寺南原古墳(No. 26)はアカマツ林から竹林、木津川市の瓦谷１号墳（No. 69）はアカマツ林からイモ畑を経て竹林といったように、商品作物としてのタケノコの栽培にシフトしていた[6)]。

果樹園と茶畑は、京都市伏見区から城陽市、京田辺市、木津川市にかけての前方後円墳に見られた。宇治川より南のエリアでは、京阪神という大市場を背景にした近郊農業地域として、近代には、梅、スモモ、柿、梨、ブドウ、桃などの果樹栽培が盛んに行われてきた。現在も城陽市ではイチジクや梅が特産品となっている。茶は言うまでもなく宇治を中心とした山城地域南部の特産品である。明治維新を迎えると、山城地域南部では輸出向けの煎茶の生産に力が入れられるようになり、そうしたなかで茶畑も広がっていった（京都府茶業百年史編纂委員会編 1994）。京田辺市の飯岡車塚古墳（No. 64）は、大正９年（1920）にはミカン畑であったが、昭和38年（1963）の段階では茶畑となっており、現在も墳丘上で宇治茶の生産が行われている(図２)[7)]。

このように、京都盆地の西部と南部の特産品の違いが、墳丘の土地利用にもよく表れていたことが分かる。

なお、長法寺南原古墳の発掘調査報告書には、前方部頂部の調査所見に以下のような記述がある（大阪大学南原古墳調査団編 1992）。

> 基準点 YSO 付近では旧表土層中で直径20㎝程度の礫数個がほぼ１m間隔で並んで検出された。平らな面を上に向けていることから小建物の礎石と

図２　飯岡車塚古墳の墳丘

考えることができる。まだ当地が松茸山であった時期に、松茸泥棒を見張るための小屋があったとする土地所有者の記憶と一致する。

京タケノコが春の京料理に欠かせない食材であるのに対して、マツタケは秋の京料理に欠かせない味覚である。宝永６年（1709）に刊行された『大和草本』のマツタケの項には、「山州ノ産尤ヨシ甚多シ牝松ニアラサレハ生セスト云」とあり、江戸中期頃にはすでに山城地域のマツタケが高く評価されていたことが分かる。長法寺南原古墳のマツタケも価値が高くて盗まれるほどのもので、その防御のために見張り小屋がつくられていた。大阪大学南原古墳調査団では発掘調査の際にアカマツ林時代を知る土地所有者への聞き取りを行い、一般的な調査報告書では省略されるであるような内容にまで詳細に記している。

（2）信仰の場としての利用

古墳はその形状や由来から、後世になると信仰の場にもなり、社寺や祠、墓などが設けられる。今回対象とした69基のうち、大正期の地図から、３基に社寺や祠の立地が、５基に墓地としての利用が確認できた。また、現在、社寺や祠が立地するのは４基、墓地となっているのは３基である（陵墓２基を除く）。そのなかから興味深い２例を挙げてみたい。

まず、長岡京市の井ノ内稲荷塚古墳（No. 21）は、後円部が削平されて、「オキツネサン」と俗称される小さな祠が祀られている。大正11年の京都市都市計画基本図からも、墳丘上に神社と巨樹があることがわかる（図14）。稲荷信仰と古墳との関係を考察した民俗学者の山田知子の論文には、この井ノ内稲荷塚古墳の稲荷の由来や伝承の記述がある（山田 1985）。

井ノ内内畑町に住む林家所有の竹藪のなかにあり、ほとんど完全な状態で保存されている。後円墳上に榊の大木があり、その根元に小さな石の祠の稲荷が祀られている。この稲荷の由来はわからないが、林家の初代（現十六代目）が当地に住むようになって以来屋敷外の鎮守として祀りつづけてこられたといわれる。古墳には稲荷を祀るものであるという古代宗教の観念があったのではないかということを思わしめる。かつては、この古墳のある竹藪のあたりで狐の姿を見かけることが多かったことから、付近に住む人々はこの古墳を狐塚と呼び、油揚げ等を持って稲荷様にお供えに行ったという。現在では、林家で時折掃除をしてお水をあげるだけになっている。

土地所有者の鎮守神であると同時に、地域住民にとっても稲荷神を祀る場にもなっていたことが分かる。

信仰の場として施設が設けられるのは墳丘上だけではない。京都市の天塚古墳（No. ４）は、嵯峨野一帯の首長墓群中、蛇塚古墳（No. ２）に次ぐ規模の前方後円墳で、渡来系豪族の秦氏に関わるものと考えられている。この墳丘全体が稲荷教の境内地となっていて、後円部の２基の横穴式石室にいずれも伯清稲荷大明神が祀られ、また、墳丘の至るところに信者によって建立された祠が点在する（図３・４）。

この参道脇に明治38年（1905）に建てられた石碑があり、そこに伯清稲荷大明神の縁起が刻まれている。

図３　伯清稲荷大明神が祀られている天塚古墳の石室

図４　祠が点在する天塚古墳の墳丘

仰伯清稲荷大明神は往時此の天塚山に鎮座ましませしが明治十九年村社木島神社の境内に遷座あり。其の後太秦村九島正太郎の母婦ちか或夜の夢に明神その枕辺にたゝせ賜えて御霊やまに還すべき由を告げ給ひしかば処に母子等御託宣のまにまに御霊を祀り建て奉りて御嶽教管轄白清教会と云ふを設しは同三十一年の事なり。斯て信者もいやまして教会の日に月に栄えり行くは偏えにかしこき神の恩頼にこそ……合議り此の碑を建て神威のいやちこなるを頌へ奉るになん。

これによると、明治19年（1886）、天塚古墳に祀っていた伯清稲荷大明神を村社である木嶋坐天照御魂神社（通称木島神社、蚕の社）へ遷座させたところ、明治31年（1898）に太秦村の九島ちかという女性の夢にこの稲荷神が現れて「還してほしい」と告げたという。その託宣に従って伯清稲荷大明神を天塚古墳の石室内に戻し、ちかと息子・庄太郎らが御嶽教管轄白清教会を組織した。その後、昭和21年（1946）に北村岩太郎氏が後継者となり稲荷教を設立して今日に至るという（大森 1994）。

なお、木嶋坐天照御魂神社の境内には今も伯清稲荷大明神が祀られていて、その社殿は半地下で石積みの構造になっている。明治19年の遷座の際に古墳の石室を模したのだろう。

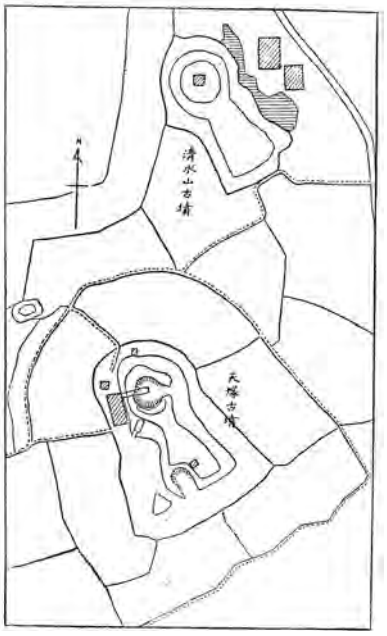

図５　天塚古墳と清水山古墳の位置図（梅原 1922a より）

（3）京都の周縁ゆえの利用

墳丘が別荘の一部となるものも２例あった。京都市の清水山古墳（No. ３）と八幡市の八幡東車塚古墳（No. 59）である。

まず、清水山古墳からみてみよう。この古墳を調査した梅原末治は以下のように記している（梅原 1922a）。

今マ京都竹中某ノ別荘ノ一部トナリ、庭園トシテ東側二泉水ヲ穿チ、封土ノ到ル處二作事セルヲ以テ、外形ヲ變ザルコト少々ニアラザルモ、コレヲ西方ヨリ望ム時ハナホ舊形ノ殘存ヲ認ムルヲ得、圖版第八ノ二ハ其ノ寫眞ナリ。

大正11年の段階では、清水山古墳は京都市の竹中氏の別荘の一部となり、墳丘の東側に泉水を設けたりして利用されていた。また、当時の図面や写真（図５・６）から、後円部の頂部に物見台が設置されていたことが伺える。その後、大正14年（1925）には篠田幸二郎という実業家の別荘「千石荘」となっていたようである。「近代京都オーバーレイマップ」から大正11年と昭和10年（1935）の都市計画図を見比べてみると、屋敷が拡大していることがわかる。竹中氏から篠田氏に所有が変わり、別荘の充実が図られたのだろう。しかし、高度経済成長期になると京都の周縁部に宅地開発の波が訪れて、清水山古墳は昭和48年（1973）に削平された。

八幡東車塚古墳（No. 59）は、石清水八幡宮（男山）南方の、男山丘陵東麓に細長くのびる扇状地に位置している。嘉永元年（1848）刊の『男山考古録』（全15巻）に「東車塚」の項があることから、早くか

図６　大正11年頃の清水山古墳（梅原 1922a より）

ら注目されていたことがわかる。この古墳には、明治政府による神仏分離政策を受けて、明治24年（1891）に石清水八幡宮の泉坊から草庵「松花堂」と書院が移された（八幡市教育委員会 2020）。地域の名士であった井上伊三郎が譲り受け、「東車塚」と呼ばれる塚のある土地に、泉坊にあった庭園とともに移したのである。前方部を削平して松花堂と書院を移築しつつ、墳丘に作庭することで書院からの眺望も確保した。後円部は庭の築山としても取り込み、古墳の形状を大いに利用するかたちで庭づくりが進められた（図７）。その作庭中の明治35年（1902）に、鏡や勾玉などの副葬品が出土して古墳の存在が広く知られることとなったのである。

井上伊三郎の没後は二男の西村芳次郎が受け継いだ。芳次郎はこの邸宅に実業家の益田孝（三井物産初代社長）や評論家の徳富蘇峰、作家の吉井勇を招き、文化的な交遊の場とした。その後、邸宅は西村家の手を離れ、迫田盛太郎と塚本清の所有を経た後、昭和52年（1977）に八幡市が公有地化し、一般に公開している。

この松花堂を含む一角は男山にある遺構とともに昭和32年（1957）に国の史跡に指定され、さらに、東車塚古墳を含む松花堂庭園の内園全体が平成26年（2014）に国の名勝に指定された。松花堂庭園の西側にある西車塚古墳（No.58）にも、明治３年（1870）に石清水八幡宮から八角堂が移され、石清水八幡宮境内の一部として平成24年（2012）に史跡の指定を受けている。廃仏毀釈という時代の大きな変化のなかで失いそうになっていた男山の神仏習合の姿の一部を、古墳がある種の避難場所・環境（レフュージア）となり、いまに伝えている。そうした捉え方もできるのではないだろうか。

（4）ランドマークとなる巨樹

大正11年の京都市都市計画基本図（図14）をみると、京都市の天皇の杜古墳（No.11）や向日市の物集女車塚古墳（No.13）は、後円部に針葉樹の巨樹が印されている。長岡京市の井ノ内稲荷塚古墳（No.21）と長法寺七ツ塚４号墳（No.24）も墳丘上に巨樹の記号が見られる。ご神木のような信仰の対象とまでは言えないものの、地域のランドマークとして、また、意味ある土地の巨樹として受け継がれてきたのだろう（図８）。現在も、天皇の杜古墳にはヒノキの大木、物集女車塚古墳にはスギを見ることができる。また、井ノ内稲荷塚古墳にはサカキの大木があるという（山田 1985）。

古墳の調査記録から、墳丘に一本松があったことが読み取れる古墳もあった。京都市の一本松塚古墳（No.12）には後円部の墳頂に老松が一本あり、そこから塚の名が付いたという（梅原 1920a）。また、八幡市の八幡茶臼山古墳（No.57）にも一本松があった。この古墳を調査した梅原末治は発掘の顛末として以下のように記している（梅原 1916）。

> 之に就て此の塚の土地所有者にして且つ發掘者なる前記祝井源太郎氏の談を聽くに、元塚の頂上に一本の松樹あり年ふりたるものなりしが、数年前陸地測量部に於て城河地方の測量を行へる際、測地の基點を定むる必要より此の大松を伐採し終えり。昨大正四年五月、其の樹根の枯死して地下に存せるを薪材になさんと思ひ立ち、同十六日同人之が掘りをこしに著手せるに、其の下部に當り表

図７　大正期の東車塚古墳（梅原 1920c より）

図８　マツ等の樹木がある昭和初期の物集女車塚古墳（梅原 1931より）

面より約六尺にして一大平板石に掘り當てられば、之を除きしに下部に一大石棺の存するを發見し大いに驚き再び元の如く埋めて、

八幡茶臼山古墳には松の大木があったが、日本陸軍参謀本部の外局であった陸地測量部が測量を行う際に基準点を墳丘上に置く必要があったため伐採された。驚くべきは、数年後にその松の木の根を燃料として掘り起こしたことで、ありとあらゆるものを使い倒していた当時の暮らしの一端が伺える。

3．古墳の伝承や来訪者の記録

(1) 古墳の祟り

山城地域の前方後円墳にまつわる口碑伝承のなかで、古墳らしいと思えるのが、発掘や開墾に伴って祟られたという伝承である。今回調べたなかでは、京都市の清水山古墳（No. 3）と巡礼塚古墳（No. 10）、八幡市の八幡東車塚古墳（No. 59）で確認できた。

清水山古墳では、発掘を試みたところ土砂崩れが起こり、祟りと考えられて調査は中止になったと伝わる（濱田 1988）。また、巡礼塚古墳には、竹藪に開墾した者が出土した遺物を壊したために目を患ったという伝承があった（丸山 1989）。八幡東車塚古墳に関しては、嘉永元年（1848）の『男山考古録』に以下の記述がある。

此地舊は社士神原市左衛門政民か祖の所領なりしか、志水町なる民小右衛門と杣職同町儀右衛門といふ者等、今より凡四十餘年許以前に山頂の樹木を伐、此所を開拓し畑とせんとて、鋤鍬もて穿んとせしか、皆々其夜より病臥て掘崩す事は止りて、儀右衛門か子清兵衛といふ者、恐怖して丘上に小祠を營みて祭ると、斯る事西車塚にも在しと、…

19世紀初頭頃に開墾しようとしたところ、皆がその夜から病にかかったため中止し、墳丘上に小祠を祀ったという。このように、古墳に手を加えると祟られると恐れられてきたことが、墳丘の存続につながった部分もあったのだろう。

(2) 外国人の来訪

古墳に関する由来や伝承とは異なるが、京都の周縁に位置するため、近代に外国人の来訪があったという記録があることも興味深い。

伯清稲荷大明神を祀る天塚古墳（No. 4）には、大正15年（1926）9月に来日中のスウェーデン王国皇太子グスターヴ・アードルフ夫妻が京都帝国大学教授濱田耕作のすすめで古墳の見学に来ている。さらに、同年11月には来日中のシャム王国文部大臣ダンニ親王も見学した。現在も墳丘に両国王族の見学を記念した碑が建っている。

また、向日市の妙見山古墳（No. 15）では、大正9年（1920）5月に学術調査が行われたが、その調査の際にノルトン・ブラウン夫人という人物の来訪があったことが梅原の記述から分かる（梅原 1922b）。

調査ノ際遺跡ヲ訪ヘルノルトン、ブラウン夫人ハ其ノ後圓ノ上部ニ於イテ一個ノ埴輪樹物片ヲ發見シ、ツイデ同行ノ濱田博士ト共ニ其ノ一隅に圓筒列ノ埋モレタルヲ檢出シテ、ソノ存在ヲ確メタリ。

濱田博士は濱田耕作と考えて良いだろう。もう一方のノルトン・ブラウン夫人については不明な点が多いが、『京都帝国大学文学部陳列館考古図録』（濱田編 1930）に「希臘オリムピヤ發見石斧」の資料寄贈者として登場したり、同夫人による『Block printing & book illustration in Japan』の序文に濱田と梅原の名が記されていたりすることから、京都帝国大学の考古学者らと何らかの関係があった人物であることが伺える。

4．墳丘を消失させた営み

山城地域の前方後円墳69基のうち29基が後世の時代に墳丘を無くしていた。一部でも削平を受けているものを含めるとその数はさらに多くなる。その理由を調べていくと、京都周縁部ならではの特徴が見えてきた。

(1) 長岡京の造営

まず、長岡京の造営である。長岡京市の今里庄ノ渕古墳（No. 22）、今里車塚古墳（No. 23）、舞塚1号墳（No. 25）、塚本古墳（No. 27）、という4基の前方後円墳は、8世紀後半の長岡京の造営に際して周壕と墳丘の一部を失った。それが高度経済成長期遺構の開発

に伴う発掘調査の過程で痕跡が見つかり、前方後円墳の存在が明らかになったのである。ただし、条坊制に規制された開発であっても、周壕を埋めて整地はされたが、墳丘をすべて削平することはしなかった。高まりとして残ったため、平安遷都以降、舞塚１号墳のある「舞塚」という地名や、塚本古墳のある「東塚本」という地名が生まれたと考えられている（長岡京市埋蔵文化財センター編 2010）。

これらの前方後円墳のなかで、さらなる復活を遂げた１基の古墳がある。それが塚本古墳である。墳丘は削平されて地上にはまったくその姿をとどめていないものの、JR 長岡京駅西口と長岡天満宮をつなぐ都市計画道路（長岡京駅前線）の整備の一環で、平成26年（2014）、古墳跡地の東側に前方後円墳のかたちのモニュメントが設置された（図９）。その北側にあるポケットパークも塚本古墳公園と名付けられている。前方後円墳があったことが都市整備のなかで土地のアイデンティティとして位置づけられて、驚くべきかたちで顕在化された。

（2）京タケノコの軟化栽培

京都盆地西部の西丘では近代以降、京タケノコの生産が広まり、その土入れ作業に伴って墳丘を失っていく事例が多くあった。京タケノコの生産は、京都の食文化に対応するなかで、柔らかさとえぐみの少なさ、色の白さが追求され、独特の栽培方法が培われてきた。その軟化栽培の最大のポイントが、秋から初冬にかけて行われる土入れ作業である。西丘でヤブと呼ぶタケノコ畑の一面にワラを敷き、その上に土を広げていく。土は所有するヤブの一部を掘ったり削ったりしたものを利用するのである（図10）。『京タケノコと鍛冶文化』（長岡京市教育委員会 2000）によると、軟化栽培方法は大正期に一般化するということなので、この頃から墳丘の改変が進んでいったのだろう。京都市の一本松塚古墳（No. 12）や向日市の寺戸大塚古墳（No. 14）、妙見山古墳（No. 15）などは、京都の食文化の成熟と引き換えに墳丘を失っていくことになった。

梅原末治は寺戸大塚古墳と妙見山古墳でその土入れのための土砂採取に伴って改変されていく過程を時おり観察していた。「墳の造成と正反対なコースで（略）構造上の様々な知見を得」、第二次世界大戦が終わるとさらにその崩壊が進んだため、発掘調査を実施して記録を残した（図11）（梅原 1955）。

（3）交通網の発展に伴う鉄道敷設

一方、山城地域の南東部では、山裾での鉄道沿線の建設に伴って墳丘を失う事例がいくつか見られた。例えば、明治27年（1894）には奈良鉄道（現在の JR 奈良線）の敷設のため、城陽市の久津川車塚古墳（No. 44）と木津川市の椿井大塚山古墳（No. 66）の墳丘が開削されている。京都と奈良を結ぶ奈良鉄道は、宇治（宇治市）と上狛（木津川市）という宇治茶の集散地を結んでいたため、この路線の開業により鉄道による茶の集荷と出荷が可能となり、茶園の拡大にもつながった。また、宇治二子塚古墳（No. 34）は、大正３・４年（1914・15）にかけての京阪宇治線の建設のために墳丘の土砂が採掘された。

図９　塚本古墳のモニュメント

図10　京タケノコの竹林とその土取場（京都市大枝塚原町）

5．古墳の保護

近代になると、陵墓や遺跡としての価値から保護が図られるようになる。今回対象とした69基のうち、一部でも現存するものが40基あり、その内、陵墓となっているものは２基、文化財として何らかの保護が図られているものは25基であった。

さらに、現代になると古墳の保護という目的のもと、史跡公園としての整備も進んでいる。山城地域の前方後円墳では７基が公園として保存・活用されていたことを最後に触れておきたい。そのなかで、平成６年（1994）に整備された天皇の杜古墳（No. 11）はヒノキの大木を含む山林を、翌平成７年（1995）に整備された物集女車塚古墳（No. 13）はランドマークとなるスギをそのまま残している。また、平成26年（2014）に整備された長岡京市の恵解山古墳（No. 28）では、墓地を維持しつつ墳丘の復元が試みられた（図12）。

おわりに

本稿では山城地域の前方後円墳を対象としてその土地利用の状況や口碑伝承の有無などについてみてきたが、そのすべてを対象とすることで、京都の周縁地域ならではの特性を鮮明に捉えることができたように思う。前方後円墳に限るとしても、一定の条件のもと総じてみていくことで浮き彫りになるものがある。近畿の他の地域や関東ではまた違う傾向があると考えられ、それは今後の課題としたい。

濱田耕作は明治35年（1902）に記した「京都附近の古墳」の最後に、研究者の参考のためとして古墳研究の要目を９点掲げている。その９番目に濱田は「口碑記録等」を挙げた。その当時は遺跡の所在地を知る手段となっていたけれども今はそうしたものは伝えられなくなっていることや、調査技術が進んで口碑伝承に頼る必要がなくなっていることはもちろん承知している。それでも、今、遺跡調査に伴って口碑伝承を尋ねたり記したりすることは決して意味がないわけではないだろう。

遺跡を、ある特定の時代（クライマックス）の姿だけで捉えるのではなくて、長い時代を経てその姿を変えながら、今に続くものとして見つめなおしたとき、その遺跡は、今の暮らしの延長線にあるものとして、より意味ある存在になるだろう。古い時代に興味をもつ限られた人たちによって大事にされる遺跡という存在だけではなくて、その地域にふつうに住んでいる人たちにも身近で、自分に関係あるものと思える存在になっていくことが、暮らしの豊かさにもつながるのではないだろうか。

【註】

1）表１の作成にあたり竹内祥一朗・小林楓（京都府立大学大学院）の協力を得た。

2）東京大学史料編纂所所蔵の「山城地域宇治郡山科地方図」は、「徳川圀順氏所蔵本」を昭和９年（1934）に模写したものである。原本は昭和20年（1945）の水戸空襲により焼失した。

3）元禄10～12年（1697～1699）には幕府によって天皇陵の探索と補修の事業が行われており、この史料はその関係で作成されたものと考えられる。

4）『古代学研究』65号の巻頭図版から転載。

5）『埋蔵文化財発掘調査の手びき』の企画者のひとりであった坪井清足氏は「手びきが出来たら、山内清男先生から、『歩兵操典』が出来たなと冷やかされた」と振り返っている（日本遺跡学会編 2014）。

図11　土入れ作業のため切り崩される妙見山古墳（梅原 1955）

図12　後円部の墓地をそのままに史跡整備された恵解山古墳

6）妙見山古墳や長法寺南原古墳のある西丘では、明治９年（1876）に京都と大阪を結ぶ鉄道（現在のJR東海道本線）が整備されたことによってタケノコの大量輸送が可能となると、アカマツ林から竹林への開墾が進み、大正期には出荷のピークを迎えたという（向日市 2020）。

7）飯岡車塚古墳を含む飯岡地区一帯は、平成27年（2015）、「玉露の郷・京田辺飯岡～丘陵地に広がる覆下茶園と集落の景観～」として京都府景観資産に登録された。

【参考文献】

石清水八幡宮社務所 1960『男山考古録（石清水八幡宮史料叢書１）』

宇治市教育委員会 1992『五ケ庄二子塚古墳発掘調査報告（宇治市文化財調査報告第３冊）』

梅原末治 1916「山城綴喜郡茶臼山古墳と其発掘物」『考古学雑誌』６巻９号

梅原末治 1919「八幡町西車塚」『京都府史蹟勝地調査會報告』第１冊 京都府

梅原末治 1920a「川岡村岡ノ古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第２冊 京都府

梅原末治 1920b「向神社付近ノ古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第２冊 京都府

梅原末治 1920c『久津川古墳研究』

梅原末治 1922a「太秦村天塚及び清水山古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第３冊 京都府

梅原末治 1922b「大枝村妙見山古墳の調査」『京都府史蹟勝地調査會報告』第３冊 京都府

梅原末治 1922c「大住村車塚古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第３冊 京都府

梅原末治 1931「寺戸の車塚古墳」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第12冊 京都府

梅原末治 1955「向日町妙見山古墳」『京都府文化財調査報告』第21冊 京都府教育委員会

大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団編 2005『井ノ内稲荷塚古墳の研究（大阪大学文学研究科考古学研究報告第３冊）』

大阪大学南原古墳調査団編 1992『長法寺南原古墳の研究（長岡京市文化財調査報告書第30冊）』長岡京市教育委員会

大森惠子 1994『稲荷信仰と宗教民俗』岩田書院

貝原篤信 1992『大和本草』有明書房

菊地暁 2008「京大国史の「民俗学」時代―西田直二郎、その〈文化史学〉の魅力と無力―」『近代京都研究』思文閣出版

京都市情報館「京都市都市計画情報等検索ポータルサイト」https://keikan-gis.city.kyoto.lg.jp/cityplanning/portal/

京都府茶業百年史編纂委員会編 1994『京都府茶業百年史』京都府茶業会議所

京都府農林水産部農政課編 2017『宇治茶の文化的景観　世界遺産暫定一覧表記載資産候補に係る提案書』

Google マップ　https://www.google.co.jp/maps/

群馬県立歴史博物館編 2021『古墳大国群馬へのあゆみ』

近藤義郎編 1992『前方後円墳集成　関西編』山川出版社

近藤義郎編 2000『前方後円墳集成　補遺編』山川出版社

時系列地形図閲覧サイト「今昔マップ on the web」https://ktgis.net/kjmapw/

新修京都叢書刊行会 1968『新修京都叢書　第11巻　都名所図会』光彩社

新修京都叢書刊行会 1967『新修京都叢書　第18巻　山州名跡志　乾』光彩社

新修京都叢書刊行会 1968『新修京都叢書　第19巻　山州名跡志　坤』光彩社

谷謙二 2017「「今昔マップ旧版地形図タイル画像配信・閲覧サービス」の開発」『GIS- 理論と応用』25（１）

玉城玲子 1988「古文書・絵図にみる物集女車塚古墳」『物集女車塚古墳（向日市埋蔵文化財調査報告書第23集）』向日市教育委員会

地図資料編纂会編 2001『正式二万分一地形図集成　関西』柏書房

東京大学史料編纂所編 1992『日本荘園絵図聚影 第２冊近畿１』東京大学出版会

長岡京市埋蔵文化財センター編 2010『長岡京市埋蔵文化財調査報告書第54冊』

長岡京市教育委員会編 2000『京タケノコと鍛冶文化（長岡京市文化財調査報告書第40冊）』

日本遺跡学会編 2014『遺跡学の宇宙―戦後黎明期を築いた十三人の記録』

林正憲 2005「中・近世社会における古墳」『井ノ内稲荷塚古墳の研究（大阪大学文学研究科考古学研究報告第３冊）』大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団

濱田耕作 1988「京都附近の古墳」『濱田耕作著作集 第１巻 日本古文化』同朋舎（初出：1902『嶽水会雑誌』第16号）

濱田耕作編 1930『京都帝国大学文学部陳列館考古図録』京都帝國大學文學部

文化庁「国指定文化財等データベース」https://kunishitei.bunka.go.jp/bsys/index

文化財保護委員会 1966『埋蔵文化財発掘調査の手びき』国土地理協会

文化庁文化財部記念物課編 2010『発掘調査のてびき　集落遺跡発掘編』

文化庁文化財部記念物課編 2013『発掘調査のてびき　各種遺跡調査編』

藤原忠實著・東京大學史料編纂所編 1960『大日本古記録　殿暦１』岩波書店

藤原頼長著・増補史料大成刊行会編 1965『増補史料大成　第24巻　台記２』臨川書店

丸川義広 1989「洛西山田の古墳分布について」『京都考古』51号

向日市 2020「向日市歴史的風致維持向上計画」

向日市教育委員会 1995『向日市埋蔵文化財調査報告書第40集　物集女車塚古墳保全整備事業報告』

森浩一 1972「元禄11年における京都市下山田の古墳調査」『古代学研究』65号

山田邦和 2021「京都府の考古学史」『考古学ジャーナル』759 ニューサイエンス社

山田知子 1985「稲荷信仰と古墳」『稲荷信仰の研究』山陽新聞社

八幡市教育委員会 2020『名勝松花堂及び書院庭園保存活用計画書』

立命館大学アート・リサーチセンター「近代京都オーバーレイマップ」https://www.arc.ritsumei.ac.jp/archive01/theater/html/ModernKyoto/

Louise Norton Brown 1924『Block printing & book illustration in Japan』

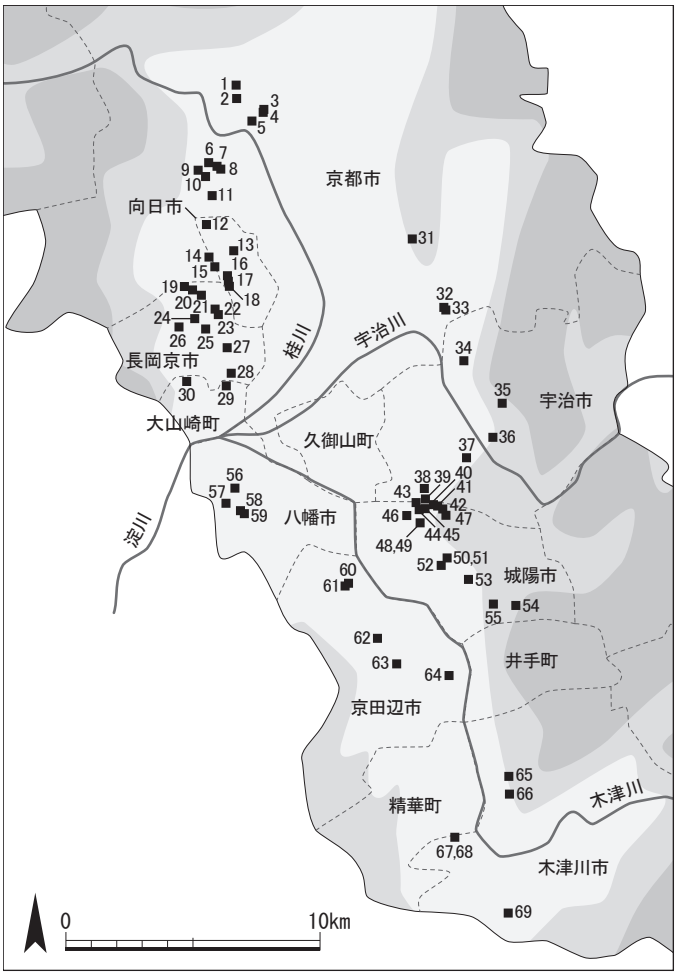

図13　山城地域の前方後円墳の位置

片平大塚古墳（No. 1）

蛇塚古墳（No. 2）

清水山古墳（No. 3）

天塚古墳（No. 4）

段ノ山古墳（No. 5）

穀塚古墳（No. 6）

清水塚古墳（No. 7）

天鼓ノ森古墳（No. 8）

天皇ノ杜古墳（No. 11）

物集女車塚古墳（No. 13）

井ノ内車塚古墳（No. 20）

井ノ内稲荷塚古墳（No. 21）

今里車塚古墳（No. 23）

長法寺七ツ塚４号墳（No. 24

恵解山古墳（No. 28）

番神山古墳（No. 31）

黄金塚２号墳（No. 33）

宇治二子塚古墳（No. 34）

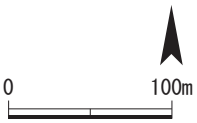

図14　京都市都市計画基本図（大正11年）に見る前方後円墳（近代京都オーバーレイマップより作成）

表1　山城地域前方後円墳の土地利用と口碑伝承

No.	市町村	古墳群名・古墳名		文化財指定	墳長（m）	現状（消失年代と理由）		墳丘の土地利用 大正期	考古学的調査研究	現在
1	京都市	嵯峨野・太秦古墳群	片平大塚古墳（垂箕山古墳）	—	65	○		陵墓。	—	陵墓「高畠墓」。
2	京都市		蛇塚古墳	国史跡 1977	75	△	〈前方部〉1950～60年代：宅地化。	竹林。	1922年：墳丘と周濠を一部残す〔2-1〕。 1936年：墳丘の封土を失う〔2-1〕。	〈石室〉国史跡として京都市が保存・公開。
3	京都市		清水山古墳	—	57	×	1973年：宅地化。	宅地、広葉樹林、針葉樹林。	1920年：竹中氏の別荘の一部となっており、庭園として東側に泉水がある。巻末図版から墳丘上には邸宅と物見台があることがわかる〔3-1〕。 1925年：実業家篠田幸二郎の別荘「千石荘」の一部となっていた〔3-2〕。	—
4	京都市		天塚古墳	国史跡 1978	71	○		神社、宅地、広葉樹林、針葉樹林、竹林。	1902年：墳丘には松が生い茂る。階段があり、石室に稲荷を祀っている〔4-1〕。 1920年：石室に伯清稲荷を祀り、墳丘上に祠と家屋が存在〔4-2〕。	山林、神社「伯清稲荷大明神」。
5	京都市		段ノ山古墳	—	75～	×	1950～60年代：宅地化。	白抜き。	—	—
6	京都市	乙訓古墳群	穀塚古墳	—	37	×	〈後円部〉1914年：土取り。 〈前方部〉1952～67年：土取り。	竹林、墓地。	1914年：後円部は土砂採掘により削平〔6-1〕。 1917年：東部分は墓地に利用〔6-1〕。 戦時中：薯畑〔6-2〕。 1952～67年：墳丘封土が壁土に良いため削平が進み消滅〔6-2〕。	—
7	京都市		清水塚古墳	—	25	×	1930～40年代以降：土取りと開墾。	墓地、広葉樹林。	1935年：森〔7-1〕。 1989年：畑〔7-1〕。	—
8	京都市		天鼓ノ森古墳	—	20	×	1950～60年代：学校建設。	白抜き。	—	—
9	京都市		山田桜谷1号墳	—	105	○		竹林。	—	山林。
10	京都市		巡礼塚古墳	—	45	×	1970～80年代：宅地化。	竹林。	1989年：寺院、宅地。以前は竹藪だった〔10-1〕。	—
11	京都市		天皇の杜古墳	国史跡 1922	83	○		後円部に針葉樹の巨樹。墳丘全体は広葉樹林。	—	史跡公園：1994年整備。
12	京都市		一本松塚古墳	—	100	×	時期不明：竹林の土入れ作業のため。	竹林。	1920年：後円部の頂上に老松が1本ある。砂利交じりの赤土からなる古墳封土が筍生産の竹林用に好まれ、前方部の大部分と後円部の東半分が削平〔12-1〕。	—
13	向日市		物集女車塚古墳	国史跡 2019	46	○		後円部に針葉樹の巨樹。墳丘全体は針葉樹林。	1927～29年：道路拡幅に伴う削平〔13-1・13-2〕。 1930年：全体は芝山で、後円部上部に松などの樹木があり目印となっている〔13-1〕。 1976年：「車塚緑地」として都市緑地に決定〔13-2〕。 1980年代：雑草と低木が生い茂る。子供たちの草滑りの遊び場として利用され、幾筋もの道ができていた〔13-2〕。	史跡公園：1995年整備。
14	向日市		寺戸大塚古墳	国史跡 2015	98	△	〈前方部〉時期不明：竹林の土入れ作業のため。	竹林。	1923年：前方部の大半は竹林で一部が削平、後円部は芝山として利用〔14-1〕。 昭和10年代：雑木林のままの後円部上部を除き、竹林の土入れのために切り崩しが進んだ〔14-2〕。	〈後円部〉伐採跡。
15	向日市		妙見山古墳	—	114	×	時期不明：竹林の土入れ作業のため。	竹林。	1920年：墳丘の東半分の松林を開墾して竹林としていた。その土入れのために封土が削り取られて石室の一部が露出した。西半分はほぼ原型を残していた〔15-1〕。 1947年：1920年以降も土入れのため掘り下げられていき、崩壊に直面〔15-2〕。	—
16	向日市		五塚原古墳	国史跡 2016	91	△	〈後円部〉北西裾部を消失：宅地化。	針葉樹林。	1967年：後円部は宅地造成により開削される。墳丘には松林が茂る〔16-1〕。	山林。
17	向日市		北山古墳	—	94	×	19世紀後半：開墾。	竹林。	明治前期：墳丘は竹林への土入れのために削平が進み、1884年頃に開墾のため消滅した〔17-1〕。	—
18	向日市		元稲荷古墳	国史跡 2017	94	△	1960年：貯水槽建設。	針葉樹林。	1920年：向神社の境内地として所々に桜等を植えて保存してある。墳丘全体は芝生となっており、後円部に稲荷社を祀る〔18-1〕。 1960年：町の最も高所にあるため墳丘に貯水槽を設置。墳頂にあった稲荷社は南東の陪塚に移されている〔18-2〕。	公園：1970年頃に開園。
19	京都市		芝1号墳（芝古墳）	国史跡 2018	33	○		竹林。	—	伐採跡。
20	長岡京市		井ノ内車塚古墳	国史跡 2016	48	○		竹林。	2005年：鬱蒼とした竹藪の中にある〔20-1〕。	伐採跡。
21	長岡京市		井ノ内稲荷塚古墳	国史跡 2016	46	○		墳丘上に神社と巨樹。	1968年：竹林の中にあり、1m削平された後円部にオキツネサンと呼ばれる祠が祀られる〔21-1〕。 2005年：オキツネサンと俗称される小さな祠が削平後の平坦面に祀られている。中世や近世の遺物も出土しており、現在に至るまで人々が活動を行ってきた場である〔21-2〕。	山林、祠「オキツネサン」。

『山州名跡志』の状況・伝承・考証	その他の口碑伝承等	出典
[状況]周濠が残り、西側に狐塚が存在。	仲野親王墓に比定されている。	〔1-1〕梅原末治 1914「山城の古墳墓」『人類学雑誌』29巻12号
—	「岩屋(いわや)」とも呼ばれたともいう。伝承として、かつて「おしげ」という三条街道で追剥をしていた女盗賊が根城にしていたという〔2-2〕。	〔2-1〕京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004「史跡・蛇塚古墳」『京都府埋蔵文化財情報』第94号、〔2-2〕竹村俊則 1983『昭和京都名所図会4　洛西』駸々堂
—	発掘を試みたが土砂崩れが起こり、祟りと考えられて調査は中止と伝わる〔3-3〕。	〔3-1〕梅原末治 1922「太秦村天塚及び清水山古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第3冊 京都府、〔3-2〕京都市歴史資料館情報提供システム　フィールド・ミュージアム京都「いしぶみデータベース」https://www2.city.kyoto.lg.jp/somu/rekishi/fm/ishibumi/html/uk111.html、〔3-3〕濱田耕作 1988「京都附近の古墳（初出：1902『嶽水会雑誌』第16号）」『濱田耕作著作集 第1巻 日本古文化』同朋舎
—	1926年9月に来日中のスウェーデン王国皇太子夫妻が濱田耕作のすすめで天塚古墳を見学。同年11月には来日中のシャム王国文部大臣が見学〔4-3〕。 1886年、伯清稲荷大明神を村社へ遷座させたところ、1898年にこの稲荷神から天塚古墳に還すようにとの託宣があり戻された。〔4-4・4-5〕。	〔4-1〕濱田耕作 1988「京都附近の古墳（初出：1902『嶽水会雑誌』第16号）」『濱田耕作著作集 第1巻 日本古文化』同朋舎、〔4-2〕梅原末治 1922「太秦村天塚及び清水山古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第3冊 京都府、〔4-3〕京都市歴史資料館情報提供システム　フィールド・ミュージアム京都「いしぶみデータベース」https://www2.city.kyoto.lg.jp/somu/rekishi/fm/ishibumi/ishibumitop.html、〔4-4〕山田知子 1985「稲荷信仰と古墳」『稲荷信仰の研究』山陽新聞社、〔4-5〕大森惠子 1994『稲荷信仰と宗教民俗』岩田書院
[状況]段ノ山古墳かは不明ながら東梅津村の北に小墓と大墓が存在。	—	
[状況]山田集落の東、北野集落の南に車塚、願王塚、鶯塚を記録。	1698年：こしき塚と呼ばれていた。。土地利用はアカマツ林〔6-3〕。 1920年：葉室塚とも呼び、葉室子爵の所有地内にある〔6-1〕。 2月14日を被葬者の命日として法事を開催〔6-2〕。	〔6-1〕梅原末治 1920「松尾村穀塚」『京都府史蹟勝地調査會報告』第2冊 京都府、〔6-2〕丸川義広 1989「洛西山田の古墳分布について」『京都考古』51号、〔6-3〕森浩一 1972「元禄11年における京都市下山田の古墳調査」『古代学研究』65号
[状況]山田集落の東、北野集落の南に車塚、願王塚、鶯塚を記録。	—	〔7-1〕丸川義広 1989「洛西山田の古墳分布について」『京都考古』51号
[伝承]天鼓の森という地名の由来は、地形が鼓のように一段高くなっている（＝墳丘）ことによる。また森の南の水田になっている字「池田」はかつては池（＝周濠？）であった。	天皷森に小社〔8-1〕。	〔8-1〕秋里籬島 1780『都名所図会』、〔8-2〕丸川義広 1989「洛西山田の古墳分布について」『京都考古』51号
—	—	
—	1698年：土地利用は草地〔10-2〕。 竹藪に開墾した者が、出土した遺物を壊したために目を患ったという伝承あり〔10-1〕。	〔10-1〕丸川義広 1989「洛西山田の古墳分布について」『京都考古』51号、〔10-2〕森浩一 1972「元禄11年における京都市下山田の古墳調査」『古代学研究』65号
[状況]墳丘の上に祠が存在。 [伝承・考証]地域住民のなかには桓武天皇陵と考える者もいたようだが、作者は文徳天皇陵に比定。墳墓の南の車塚は天皇の車を埋めたところと認識されていた。	文徳天皇陵として記載〔11-1〕。 中世に文徳天皇陵であるとの伝説が生れ、地域では「御陵さん」とよばれてきた。文徳陵と解されたのは近くに真如院があったためと推定される。なお「延喜式」にみえる大岡墓を天皇の杜古墳に比定する説もある〔11-2〕〔11-3〕。 後円部にあるヒノキの大木は京都市の「区民の誇りの木」に選定された〔11-4〕。	〔11-1〕秋里籬島 1780『都名所図会』、〔11-2〕平凡社編 1981『京都府の地名（日本歴史地名大系第26巻）』、〔11-3〕京都市情報館「史跡天皇の杜古墳」https://www.city.kyoto.lg.jp/bunshi/page/0000005646.html、〔11-4〕京都市情報館「西京区・区民の誇りの木」https://www.city.kyoto.lg.jp/kensetu/page/0000022452.html
—	明治35・36年（1902・03）頃、地域住民のなかには桓武天皇の御陵とする者がいた〔12-1〕。	〔12-1〕梅原末治 1920「川岡村岡ノ古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第2冊 京都府
[考証]車塚と呼ばれる古墳を、近隣に所在する「廟所塚」に葬送された淳和天皇の車を納めたものと推定。	物集女車塚古墳の北西300mに淳和天皇火葬塚がある。『山州名跡志』は淳和天皇御葬所の次に「在右所巽方一町餘、是則御車納所歟」と記し、『山陵志』にも「物集村有墳、曰車塚相伝淳和帝霊車火於此猶可擬山陵」とある。車塚という名はこれに由来する〔13-3〕。 中山家文書によると、元禄期の陵墓調査以降、陵墓参考地として扱われて整備がすすみ、その一環として墳丘頂部にスギ苗が植えられたことが分かる。文久期に陵墓参考地から外された〔13-4〕。 整備の際、墳頂のスギを伐採すると玄室にも何らかの影響を与えかねないこと、また地域のランドマーク的な役割を果たしてきたことから現状保存とした〔13-2〕。	〔13-1〕梅原末治 1931「寺戸の車塚古墳」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第12冊 京都府、〔13-2〕向日市教育委員会 1995『向日市埋蔵文化財調査報告書第40集　物集女車塚古墳保全整備事業報告』、〔13-3〕平凡社編 1981『京都府の地名（日本歴史地名大系第26巻）』、〔13-4〕玉城玲子 1988「古文書・絵図にみる物集女車塚古墳」『物集女車塚古墳（向日市埋蔵文化財調査報告書第23集）』向日市教育委員会
—	—	〔14-1〕梅原末治 1923「乙訓郡寺戸ノ大塚古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第4冊 京都府、〔14-2〕梅原末治 1955「乙訓郡寺戸大塚古墳」『京都府文化財調査報告』第21冊 京都府教育委員会、〔14-3〕京都大学文学部考古学研究室向日丘陵古墳群調査団 1971「京都向日丘陵の前期古墳群の調査」『史林』54巻6号
—	ノルトン・ブラウン夫人と同行の濱田博士によって埴輪が発見された〔15-1〕。	〔15-1〕梅原末治 1922「大枝村妙見山古墳の調査」『京都府史蹟勝地調査會報告』第3冊 京都府、〔15-2〕梅原末治 1955「向日町妙見山古墳」『京都府文化財調査報告』第21冊 京都府教育委員会
[考証]小畑川左岸のひときわ大きい古墳として挙げられ、『延喜式』記載の藤原氏出身の皇太后の墓に比定される。	高畠陵（桓武天皇皇后の藤原乙牟漏の墓）と考えられていた。 『聖蹟図志』（1854）には一面が「小松山」と記され、マツも描かれている、〔16-2〕。	〔16-1〕堤圭三郎・高橋美久二 1968「向日丘陵地遺跡分布調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会、〔16-2〕津久井清影1854『聖蹟図志』、〔16-3〕向日市埋蔵文化財センター 2020『五塚原古墳（向日市埋蔵文化財調査報告書第117集）』向日市教育委員会
—	すぐ北には天狗塚という小字名もあり、早くから墳丘が認められていたことがわかる〔17-2〕。	〔17-1〕梅原末治 1920「向神社付近ノ古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第2冊 京都府、〔17-2〕平凡社編 1981『京都府の地名（日本歴史地名大系第26巻）』
[状況]明確な記載はないが、五塚原古墳の南東に塚が散在することを記録。	元稲荷という名は、近年まで墳頂に稲荷社が祀られていたことによる。墳丘全体は現在勝山公園の中にあり保存されているが、後方部には貯水槽が設けられ、主体部が破壊されている〔18-3〕。 元稲荷古墳の開発計画が持ち上がり、当時の向日町が買い上げて勝山公園を開園。古墳保存の意味もあった〔18-4〕。	〔18-1〕梅原末治 1920「向神社付近ノ古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第2冊 京都府、〔18-2〕西谷眞治 1964「向日町元稲荷古墳」『京都府文化財調査報告』第24冊 京都府教育委員会、〔18-3〕平凡社編 1981『京都府の地名（日本歴史地名大系第26巻）』、〔18-4〕向日市 2020「向日市歴史的風致維持向上計画」
[状況]地域住民は「高塚」と呼称。 [考証]『延喜式』にみえる藤原氏出身の皇太后を埋葬した高畠陵に比定。	—	〔19-1〕堤圭三郎・高橋美久二 1968「向日丘陵地遺跡分布調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会
[状況・考証]『延喜式』の長岡陵の候補地として、上羽村や粟生村に「大塚」が多数存在することを記載。	—	〔20-1〕大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団編 2005『井ノ内稲荷塚古墳の研究（大阪大学文学研究科考古学研究報告第3冊）』、〔20-2〕長岡京市埋蔵文化財センター 2021『国史跡乙訓古墳群井ノ内車塚古墳の調査（長岡京市文化財調査報告書第77冊）』長岡京市教育委員会
[状況・考証]『延喜式』の長岡陵の候補地として、上羽村や粟生村に「大塚」が多数存在することを記載。	後円部上にサカキの大木があり、その根元に小さな石の祠の稲荷が祀られている。かつては近隣住民により狐塚と呼ばれ、油揚げ等を供えたという〔21-3〕。	〔21-1〕堤圭三郎・高橋美久二 1968「向日丘陵地遺跡分布調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会、〔21-2〕大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団編 2005『井ノ内稲荷塚古墳の研究（大阪大学文学研究科考古学研究報告第3冊）』、〔21-3〕山田知子 1985「稲荷信仰と古墳」『稲荷信仰の研究』山陽新聞社

表１　山城地域前方後円墳の土地利用と口碑伝承

No.	市町村	古墳群名・古墳名		文化財指定	墳長（m）	現状（消失年代と理由）		墳丘の土地利用 大正期	考古学的調査研究	現在
22	長岡京市	乙訓古墳群	今里庄ノ渕古墳	—	30	×	8世紀後半：長岡京造営。	一部宅地化。	—	—
23	長岡京市		今里車塚古墳	—	74	×	8世紀後半：長岡京造営、1950年代以降：道路拡幅・宅地化。	水田。	—	—
24	長岡京市		長法寺七ツ塚4号墳	—	20～	×	1988年の調査後：宅地化。	墳丘上に巨樹。	1987年：樹木や雑草で覆われていた〔24-1〕。	—
25	長岡京市		舞塚1号墳	—	39	×	8世紀後半：長岡京造営。ただし、完全には削平されなかった可能性あり。	荒地。	—	—
26	長岡京市		長法寺南原古墳	国史跡 2018	145	○		竹林。	1934年：もともとは松林であり、筍生産用の竹林の土取り作業中に発見〔26-1〕。 1992年：手入れの行き届いた竹藪だが、土入れ作業のため墳丘は大きく改変。松茸山だった時期に松茸泥棒を見張るための小屋が前方部にあったという〔26-2〕。	竹林。
27	長岡京市		塚本古墳	—	32	×	8世紀後半：長岡京造営。ただし、完全には削平されなかった可能性あり。	水田。	—	—
28	長岡京市		恵解山古墳	国史跡 1981	128	○		竹林、墓地。	1925年：後円部の半分が墓地、他は竹林で、一部土入れのため改変〔28-1〕。 1967年：墓地、畑地、竹林に利用〔28-2〕。 1990年：勝竜寺の区有墓地、畑地、竹藪〔28-3〕。	墓地、史跡公園：2014年整備。
29	大山崎町		境野1号墳＊	—	58	○		竹林、墓地。	—	竹林、墓地、堂宇「龕前堂」他。
30	大山崎町		鳥居前古墳	国史跡 2016	54	○		針葉樹林。	1987年：墳丘の一部は筍生産のための土取りにより破壊〔30-1〕。 2019年：竹林〔30-2〕。	竹林。
31	京都市	番神山古墳（番神塚古墳）		—	40	×	1950～60年代：宅地化。	広葉樹林。	1914年：後円部に樫・柿が疎生〔31-1〕。	—
32	京都市	黄金塚1号墳		—	100	×	1960～70年代：宅地化。	茶畑。	—	—
33	京都市	黄金塚2号墳		—	120	△	〈前方部〉1940～50年代：学校建設。	果樹園、竹林。	～1982年：竹林で、採土も行われた〔33-1〕。	〈後円部〉陵墓「巨幡墓」。
34	宇治市	宇治古墳群	宇治二子塚古墳（五ケ庄二子塚古墳）	国史跡 2018	112	△	〈後円部〉1914・15年：鉄道敷設のための土取り。	広葉樹林、墓地。	1914～15年：京阪宇治線建設のため墳丘が採掘されるも、関白近衛兼経の墓地となっている前方部は残った〔34-1〕。	〈前方部〉竹林、西法寺境内地で中腹に鎌倉時代の公卿・近衛兼経の墓。
35	宇治市	五雲峰古墳群	五雲峰1号墳	—	30	×	時期不明。	針葉樹林。	—	—
36	宇治市	菟道谷下り古墳群	菟道門ノ前古墳	—	35	×	中世以降：開墾。	水田。	中世以降：削平されて水田として平坦化した〔36-1〕。	—
37	宇治市	宇治丸山古墳		—	36	×	1966年：土取り。	竹林。	1923年：後円部には松が疎生していたが、1912年に伐採して畑としようとしたときに遺物が発見されたと伝わる〔37-1〕。	—
38	宇治市	坊主山古墳群	坊主山1号墳	—	45	×	1964年の調査後：宅地化。	広葉樹林。	1964年：墓地、土砂採取〔38-1〕。	—
39	城陽市	西山古墳群	西山1号墳	—	76	×	1960年代：宅地化。	針葉樹林、茶畑。	—	—
40	城陽市		西山7号墳	—	60	×	1960年代：宅地化。	針葉樹林、広葉樹林。	—	—
41	城陽市	上大谷古墳群	上大谷8号墳	市史跡 1990	33	○		針葉樹林。	1977年：山林〔41-1〕。	山林。
42	城陽市		上大谷1号墳	市史跡 1990	30	○		果樹園。	1977年：墳丘、周濠部分は竹林造成と土取りにより改変〔42-1〕。	古墳公園。
43	城陽市	久津川古墳群（平川古墳群）	芭蕉塚古墳（童子山古墳）	国史跡 1981	114	○		果樹園。	表土の下に耕作土を確認〔43-1〕。	竹林。
44	城陽市		久津川車塚古墳	国史跡 1979	184	○		針葉樹林、鉄道。	1894年頃：後円部が奈良鉄道の敷設のために開削され、石棺が出土〔44-1・44-2〕。 1920年：前方部は開墾。図版から墳丘はアカマツ林とわかる〔44-2〕。	山林、JR奈良線。
45	城陽市		丸塚古墳	国史跡 1980	80	○		果樹園。	明治30年前後：開墾により墳丘が削平〔45-1〕。	山林。
46	城陽市		箱塚古墳	—	100	×	大正期以降：宅地化。	竹林、茶畑。	—	—
47	城陽市	尼塚古墳群	尼塚4号墳	—	36	×	1968年の調査後：宅地化。	果樹園。	1966年：墳丘上は樹木が繁茂〔47-1〕。	—
48	城陽市	芝ヶ原古墳	芝ヶ原5号墳	国史跡 1989	34	○		針葉樹林。	—	史跡公園。
49	城陽市		芝ヶ原6号墳	国史跡 1989	45	○		針葉樹林。	—	史跡公園。
50	城陽市	梅ノ子塚古墳群	梅ノ子塚1号墳	—	87	○		果樹園、竹林。	1948年：畑〔50-1〕。 1988年：竹林〔50-1〕。	竹林。
51	城陽市		梅ノ子塚2号墳	—	69	△	〈前方部〉時期不明。	果樹園、竹林。	近世末～：開墾が進行か〔51-3〕。 戦後：畑や果樹園として利用〔51-3〕。 1988年：竹林〔51-1〕。	〈後円部〉竹林。
52	城陽市	長池古墳		—	50	×	1964年の調査後：宅地化。	果樹園。	—	—
53	城陽市	胄山古墳群	胄山1号墳	—	28	×	1966年の調査後：山砂採取。	果樹園。	1976年頃：砂利採取〔53-1〕。	—

『山州名跡志』の状況・伝承・考証	その他の口碑伝承等	出典
[状況]「車塚」の名を記載。近くには乙訓寺の閼伽井があった	—	〔22-1〕石尾政信 1985「長岡京跡右京第171次」『京都府埋蔵文化財情報』15号 京都府埋蔵文化財調査研究センター
—	—	〔23-1〕堤圭三郎・高橋美久二 1968「向日丘陵地周辺遺跡分布調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会
—	江戸時代に作成されたとされる「長法寺村田面絵図」に円形の姿が描かれている〔24-2〕。	〔24-1〕大阪大学稲荷塚古墳発掘調査団編 2005『井ノ内稲荷塚古墳の研究（大阪大学文学研究科考古学研究報告第3冊）』、〔24-2〕長岡京市史編さん委員会 1997『長岡京市史』本文編2 長岡京市、〔24-3〕長岡京市埋蔵文化財センター 1988『長法寺七ッ塚古墳群』（長岡京市文化財調査報告書第21冊）』長岡京市教育委員会
—	もとの地名は大字今里小字舞塚で、古墳の存在を裏付けている〔25-1〕。	〔25-1〕高橋美久二他 1979「長岡京跡昭和53年度発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報（1979）』京都府教育委員会、〔25-2〕山口博 1983「長岡京跡右京第105次」『京都府埋蔵文化財情報第7号』京都府埋蔵文化財調査研究センター
—	—	〔26-1〕梅原末治 1937「乙訓村長宝持南原古墳の調査」『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第17冊、〔26-2〕大阪大学南原古墳調査団 1992『長法寺南原古墳の研究（長岡京市文化財調査報告書第30冊）』長岡京市教育委員会
—	2014年、跡地の近くに古墳のモニュメントを設置。その北側の公園の名称を「塚本古墳公園」としている。	〔27-1〕長岡京市埋蔵文化財センター 1984『長岡京市埋蔵文化財調査報告書第1冊』、〔27-2〕長岡京市埋蔵文化財センター 2010『長岡京市埋蔵文化財調査報告書第54冊』
—	1582年の山崎の戦いの際、恵解山古墳に明智光秀の本陣が置かれたという説があったが、史跡整備に伴う発掘調査から、戦国時代に戦場となった痕跡が見つかった。前方部は16世紀末頃に墓地となりはじめ、17世紀後半にはかなりの埋葬数になったと考えられる〔28-4〕。	〔28-1〕 梅原末治 1925「恵解山古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第6冊、〔28-2〕堤圭三郎・高橋美久二 1968「向日丘陵地遺跡分布調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会、〔28-3〕長岡京市教育委員会 1990『史跡恵解山古墳（長岡京市文化財調査報告書第25冊）』、〔28-4〕長岡京市教育委員会 2015『史跡恵解山古墳保存・整備事業報告書（長岡京市文化財調査報告書第67冊）』
—	報告書刊行後に境野1号墳の遺構は、隣接するサントリー京都ビール工場の緑地と古墳の保全のために、サントリー株式会社によって用地が買い上げられた〔29-1〕。	〔29-1〕大山崎町教育委員会 2007『境野1号墳（大山崎町埋蔵文化財調査報告書第34集）』
—	—	〔30-1〕大阪大学鳥居前古墳調査団 1987『鳥居前古墳』、〔30-2〕大山崎町教育委員会 2019『鳥居前古墳（大山崎町埋蔵文化財調査報告書第54集）』
[状況]日蓮宗の祠あり。 [伝承]関白太政大臣藤原基経の墓と伝わる。	関白太政大臣藤原基経の墓、またはその母である藤原乙春の墓との伝承あり〔31-2〕。 『平安通志』（京都市参事会編 1895）では『延喜式』にある深草墓の比定地としているがそうではないだろう〔31-3〕。 墳丘上に堂舎がある姿が『聖蹟図志』（1854）に記されている〔31-4〕。	〔31-1〕梅原末治 1914「山城の古墳墓」『人類学雑誌』29巻12号、〔31-2〕平凡社編 1979『京都市の地名（日本歴史地名大系第27巻）』、〔31-3〕濱田耕作 1988「京都附近の古墳（初出：1902『嶽水会雑誌』第16号）」『濱田耕作著作集 第1巻 日本古文化』同朋舎、〔31-4〕津久井清影1854『聖蹟図志』
—	—	
[伝承・考証]小野篁の墓になぞらえられて築造されたと作者は考証。	—	〔33-1〕久保田健士 1982「黄金塚2号墳発掘調査概要」『京都府遺跡調査概報』第4冊
—	藤原忠実の日記『殿暦』に「二子墓」、藤原頼長の日記『台記』に「二子陵」と記載。大正期の土取りの際に出土した巨石を西法寺本堂の裏庭に据えたという〔34-2〕。 鎌倉初期の荘園絵図に「二子塚」の記載〔34-3〕。 墳丘をダンノヤマ、周濠をダンノイケと俗称〔34-2・34-4〕。	〔34-1〕梅原末治 1923「五箇荘二子塚古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第4冊、〔34-2〕宇治市教育委員会 1992『五ケ庄二子塚古墳発掘調査報告（宇治市文化財調査報告第3冊）』、〔34-3〕東京大学史料編纂所編 1992『日本荘園絵図聚影 第2冊近畿1』東京大学出版会、〔34-4〕平凡社編 1981『京都府の地名（日本歴史地名大系第26巻）』、〔34-5〕土橋誠 1996「宇治二子塚古墳」『京都府埋蔵文化財情報』第61号 京都府埋蔵文化財調査研究センター
—	—	〔35-1〕京都府教育委員会編 1981『埋蔵文化財発掘調査概報』第1分冊
—	—	〔36-1〕宇治市教育委員会編 1998『菟道門ノ前古墳・菟道遺跡発掘調査報告書（宇治市文化財調査報告第5冊）』
—	摺鉢山と呼ばれる〔37-1〕。	〔37-1〕梅原末治 1923「宇治町丸山古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第4冊 京都府、〔37-2〕岩井武俊 1913「近時発掘城・河の二古墳とその発見遺物」『考古学雑誌』3巻7号
—	周辺のはげ山が坊主山と呼ばれていた〔38-1〕。	〔38-1〕堤圭三郎 1965「坊主山古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会
—	—	
—	—	
—	—	〔41-1〕岡本一士他 1977『京都府城陽市上大谷古墳群の調査—試掘調査報告書（考古学研究室調査報告第1冊）』
—	—	〔42-1〕岡本一士他 1977『京都府城陽市上大谷古墳群の調査—試掘調査報告書（考古学研究室調査報告第1冊）』
[状況]地域住民は「梶塚」と呼称。	—	〔43-1〕城陽市教育委員会 1977『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第5集
[状況・考証]山のような形状をなすため、車を埋めた塚と推定。久津川車塚古墳の西にも古墳が存在。寛文年間に水田から人骨と朱沙が出土。	地域住民からは車塚と呼ばれる〔44-1〕。	〔44-1〕濱田耕作 1988「京都附近の古墳（初出：1902『嶽水会雑誌』第16号）」『濱田耕作著作集 第1巻 日本古文化』同朋舎、〔44-2〕梅原末治1920『久津川古墳研究』
[状況]地域住民は「鴻島」と呼称。	—	〔45-1〕城陽市教育委員会 1986『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第15集
—	—	
—	—	〔47-1〕山田良三他 1969「尼塚古墳群発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会
—	—	
—	—	
—	—	〔50-1〕城陽市教育委員会 1988『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第18集
—	—	〔51-1〕城陽市教育委員会 1988『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第18集 、〔51-2〕城陽市教育委員会 1997『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第33集、〔51-3〕城陽市教育委員会 1998『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第34集
—	—	
—	—	〔53-1〕堤圭三郎 1967「宵山古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会

表１　山城地域前方後円墳の土地利用と口碑伝承

No.	市町村	古墳群名・古墳名		文化財指定	墳長（m）	現状（消失年代と理由）		墳丘の土地利用 大正期	考古学的調査研究	現在
54	城陽市	青谷丸山古墳群	青谷丸山1号墳	—	30	○		果樹園。針葉樹林。		山林。
55	城陽市	青谷石神古墳群	青谷石神1号墳	—	40	○		竹林、果樹園、茶畑。	大正期：墳丘の一部が削平〔55-1〕。 1985年：墳丘で砂利採取時に石室出土〔55-1〕。	山林。
56	八幡市	石不動古墳		—	75	×	1972年頃：電波塔。	針葉樹林。	1942年：前田氏が山荘を営むために松林を伐採したところ遺物が出土〔56-1〕。 1965年：山林〔56-2〕。 1972年：電波塔が開業〔56-3〕。	—
57	八幡市	八幡茶臼山古墳		—	50	×	1968年の調査後：宅地化。	針葉樹林、竹林。	1915年：墳丘上に一本の松の大木が存在していたが測量に際して伐採された。その松の根を燃料とするために地中を掘ったところ石室が出土した〔57-1〕。 1968年：墳頂部は雑木林で、直径40cmにおよぶ松、ヒノキ、クヌギなどの大木をはじめとする灌木等がうっそうと生い茂っていた。墳丘斜面は竹林で、周囲は竹林の土入れ替え作業のため削られていた〔57-2〕。	—
58	八幡市	八幡西車塚古墳		国史跡2012	115	○		寺院、宅地。	1903年：八角堂の庭の工事があり石室が掘られた。その様子を見ていたという河井うの女によると、河内街道から後円部に登る石段にその石室の石材が使われたという〔58-1〕。 1918年：前方部は早くに開墾されて果樹園〔58-1〕。 1965年：宅地、竹林、畑〔58-2〕。	〈前方部〉山林。 〈後円部〉堂宇「八角堂」。
59	八幡市	八幡東車塚古墳		国史跡1957 国名勝2014	94	△	1897年以降：別荘の造営。	宅地。	1916年：墳丘は井上氏の別荘で、墳丘は地均しされて庭が造作〔59-1〕。 1965年：前方部は民家、後円部は庭に利用。民家は東車塚庭園として茶室で有名である〔59-2〕。	邸宅・庭園「八幡市立松花堂庭園・美術館」。
60	京田辺市	大住車塚古墳		国史跡1974	66	○		針葉樹林。	1920年：水田開墾のために一部削平、墳丘上は松林〔60-1〕。 1963年：山林〔60-2〕。	山林。
61	京田辺市	大住南塚古墳		—	71	△	〈前方部〉時期不明：水田。	白抜き。	1894年頃：後円部を開墾して畑とした際に主体部を破壊〔61-1〕。 1920年：墳丘上を茶畑と果樹園に利用〔61-1〕。 1963年：畑地〔61-2〕。 1987年：墳丘には果樹園の名残りとして十数本の柿の木の他、雑木・笹竹・イバラが繁茂〔61-3〕。	山林。
62	京田辺市	天理山古墳群	天理山3号墳	—	81	○		果樹園。	1965年：山林〔62-1〕。	山林。
63	京田辺市	興戸古墳群	興戸1号墳	—	24	○		針葉樹林。	—	山林。
64	京田辺市	飯岡古墳群	飯岡車塚古墳	—	81	○		果樹園。	1919年：墳丘全体は密柑畑。後円部の頂上に約2坪の芝地があり、そこに桜がを植えて中央に古墳と題する碑を建てている〔64-1〕。 1963年：茶畑〔64-2〕。 1972年：墳丘の大部分が茶畑に一部が竹林に利用〔64-3〕。	〈前方部〉茶畑。 〈後円部〉竹林、草地。
65	木津川市	平尾城山古墳		—	110	○		針葉樹林、果樹園。	～1977年：筍栽培用の竹林の開墾・土入れのために開削〔65-1〕。	竹林。
66	木津川市	椿井大塚山古墳		国史跡2000	175	○		宅地、果樹園、鉄道。	1894年・1953年：奈良鉄道の敷設と改修のために後円部が開削される〔66-1〕。 1953年：前方部には民家が営まれ、後円部は畑や竹藪となっており、南側の一角には小屋も建っている〔66-1〕。	〈前方部〉宅地。 〈後円部〉竹林、JR奈良線。
67	木津川市	吐師七ッ塚古墳群	吐師七ッ塚4号墳	—	35	○		果樹園。	1933年：墳丘上には松が茂る〔67-1〕。 ～1970年代：周濠は耕地とため池に利用〔67-2〕。	山林。
68	木津川市		吐師七ッ塚5号墳	—	35	○		果樹園。	1933年：墳丘上には松が茂る〔68-1〕。 ～1970年代：前方部が瓦工場の土取場となっており、周濠跡は工場敷地に利用〔68-2〕。	草地。
69	木津川市	瓦谷古墳群	瓦谷1号墳	—	51	×	〈前方部〉時期不明：水田。 〈後円部〉1992年の調査後：宅地化。	針葉樹林。	1990年：前方部は水田。後円部は、松林→芋畑→竹林と推移〔69-1〕。	—

『山州名跡志』の状況・伝承・考証	その他の口碑伝承等	出典
—	—	
—	—	〔55-1〕梶本敏三 1986「青谷石神古墳群について」『京都府埋蔵文化財情報』21号 京都府埋蔵文化財調査研究センター
—	—	〔56-1〕梅原末治 1955「八幡石不動古墳」『京都府文化財調査報告』第21冊 京都府教育委員会、〔56-2〕京都大学考古学研究会 1965「南山城地方踏査報告 その1」『第13とれんち』、〔56-3〕江谷寛 1991「石不動古墳発掘調査概報」『八幡市埋蔵文化財発掘調査概報』第9集 八幡市教育委員会
—	—	〔57-1〕梅原末治 1916「山城綴喜郡茶臼山古墳と其発掘物」『考古学雑誌』6巻9号、〔57-2〕京都府教育委員会 1969「八幡丘陵地所在遺跡発掘調査概要」『京都府埋蔵文化財概報』
[状況]男山の南の山麓に「車塚」という塚を記載。	『男山考古録』(1848)に西車塚の記述〔58-3〕。 「八幡山上山下惣絵図」(江戸時代中期)に西車塚の描写〔58-4〕。 1870年:石清水八幡宮の境内から後円部に八角堂を移築〔58-4〕。 八角堂前に1872年に建てられた濱田耕作の書による「母泥之阿治佐波毘賣命御墓参考地」の碑がある。「石清水八幡宮境内」として国史跡に指定。	〔58-1〕梅原末治 1919「八幡町西車塚」『京都府史蹟勝地調査會報告』第1冊 京都府、〔58-2〕京都大学考古学研究会 1965「南山城地方踏査報告 その1」『第13とれんち』、〔58-3〕石清水八幡宮社務所 1960『男山考古録(石清水八幡宮史料叢書1)』、〔58-4〕八幡市教育委員会 2020『名勝松花堂及び書院庭園保存活用計画書』
[状況]男山の南の山麓に「車塚」という塚を記載。	「八幡山上山下惣絵図」(江戸時代中期)に東車塚の描写〔59-3〕。 19世紀初頭頃に開墾を試みたが、皆が病気になったため中止し、塚上に小祠を祀った〔59-4〕。 1897年以降:明治の神仏分離に際して、石清水八幡宮そばから前方部に松花堂と書院が移され、後円部は築山として庭園の一部となった〔59-3〕。	〔59-1〕梅原末治 1920『久津川古墳研究』、〔59-2〕京都大学考古学研究会 1965「南山城地方踏査報告 その1」『第13とれんち』、〔59-3〕八幡市教育委員会 2020『名勝松花堂及び書院庭園保存活用計画書』、〔59-4〕石清水八幡宮社務所 1960『男山考古録(石清水八幡宮史料叢書1)』
—	地域住民の間では継体天皇第八皇子の墓と伝わり、八王寺の車塚、または智光寺山と呼称〔60-1〕。 『京都府田辺町史』ではチコンジ山古墳と記載〔60-3〕。	〔60-1〕梅原末治1922「大住村車塚古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第3冊 京都府、〔60-2〕京都大学考古学研究会 1965「南山城地方踏査報告 その1」『第13とれんち』、〔60-3〕田辺郷土史会編 1968『京都府田辺町史』田辺町
—	地域住民の間では継体天皇第五皇子の墓と伝わり、耳皇子の車塚と呼称〔61-1〕。 『京都府田辺町史』ではシヨンベ池古墳と記載〔61-4〕。	〔61-1〕梅原末治 1922「大住村車塚古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第3冊 京都府、〔61-2〕京都大学考古学研究会 1965「南山城地方踏査報告 その1」『第13とれんち』、〔61-3〕田辺町教育委員会 1987『大住南塚古墳発掘調査概報Ⅱ(田辺町埋蔵文化財調査報告書第7集)』、〔61-4〕田辺郷土史会編 1968『京都府田辺町史』田辺町
—	—	〔62-1〕京都大学考古学研究会 1965「南山城地方踏査報告 その1」『第13とれんち』、〔62-2〕京田辺市 2021「天理山3号墳の発掘調査現地公開資料」
—	周溝底から中世(室町時代か)の瓦が見つかり、周溝が中世まで維持されていたか、中世に古墳を利用した施設が存在したことが考えられる〔63-1〕。	〔63-1〕田辺町教育委員会編 1995『興戸遺跡第12次・興戸古墳群発掘調査概報(田辺町埋蔵文化財調査報告書第19集)』
—	上殖葉王古墳という俗称があり、石碑がある〔64-2〕。 後円部の頂部に「上殖葉王古墳」と記した石碑がある。	〔64-1〕梅原末治 1920「飯ノ岡ノ古墳」『京都府史蹟勝地調査會報告』第2冊 京都府、〔64-2〕京都大学考古学研究会 1965「南山城地方踏査報告 その1」『第13とれんち』、〔64-3〕龍谷大学文学部考古学資料室 1972『南山城の前方後円墳　龍谷大学文学部考古学資料室研究報告Ⅰ』
—	—	〔65-1〕平安博物館第三研究室 1977『平尾城山古墳第1次発掘調査概報』
—	—	〔66-1〕梅原末治 1964「椿井大塚山古墳」『京都府文化財調査報告』第24冊 京都府教育委員会
—	—	〔67-1〕梅原末治・赤松俊秀 1933「吐師七つ塚古墳発見品」『京都府史跡名勝天然紀念物調査報告』第14冊 京都府、〔67-2〕龍谷大学文学部考古学資料室 1972『南山城の前方後円墳　龍谷大学文学部考古学資料室研究報告Ⅰ』
—	—	〔68-1〕梅原末治・赤松俊秀 1933「吐師七つ塚古墳発見品」『京都府史跡名勝天然紀念物調査報告』第14冊 京都府、〔68-2〕龍谷大学文学部考古学資料室 1972『南山城の前方後円墳　龍谷大学文学部考古学資料室研究報告Ⅰ』
—	明治期には地元で「車塚」と俗称されていた形跡がある〔69-1〕。	〔69-1〕京都府埋蔵文化財調査研究センター 1997『京都府遺跡調査報告書23冊　瓦谷古墳群』